



# 通信

2024. 8. 23 No. 173

公益社団法人 福島原発行動隊

東京都千代田区神田淡路町1-21-7

静和ビル 1階A室 〒101-0063

Tel: 03-3255-5910 Fax: 03-3525-4811

Mail: svcf-admin@svcf.jp Web: http://svcf.jp

転居された方は事務局 ([svcf-admin@svcf.jp](mailto:svcf-admin@svcf.jp)) まで転居先をお知らせください

## 暑中お見舞い申し上げます

### 不忍池の蓮の花

麻生良二

8月1日の母の月命日参りに築地本願寺に向かう地下鉄大江戸線の車中で、不忍池の蓮の花が咲盛りである事を思い出し、お参りより先にそのまま大江戸線で足を延ばして新御徒町駅で降車、不忍池の辺りまで歩いた。不忍池の辺りには多数の風鈴で飾った臨時の観覧場所が設置されており、風に吹かれて鳴る風鈴の音を聴きながら、満開の見事な蓮の花の競演を鑑賞した。中には盛りを過ぎ少し花びらを落とした花もあり、仏様の花として盛者必衰を教えてくれる趣も感じる事ができたが、多くの花は桃色に輝き、極楽浄土を想わせる姿であった。見物に来ていた観光客の中には、ロンドンから母親の故郷台湾に帰省する途中の母娘連れがいて、母親とは英語でロンドンの思い出を話したり、女兒達とはディズニーランド観光の感想などを聞かせてもらい、小さな国際交流を図る事ができた。蓮の花のとりもつ縁の一日であった。



### 処暑雑感

加藤 朗

昨年来取り組んでいた2冊の翻訳本を今年2月と6月に無事出版。今は、その翻訳本を含め、硝石と黒色火薬のグローバル・ヒストリーについて筆耕の毎日です。私が1年足らずのうちに合わせて2冊、数百ページもの本を翻訳できたのも、翻訳ソフトのDeepLとAIのChatGPTやBing AIのおかげです。

ここ2~3年で AI の進歩は劇的です。翻訳、執筆や研究、調査のスタイルが劇的に変わりました。日進月歩どころか秒進分歩のスピードで正確、的確な翻訳や検索ができるようになってきました。このまま AI が進化すれば、教育、メディア、医療などあらゆる産業が劇的な変化に見舞われ

るでしょう。

今取り組んでいるテーマは、中国は火薬や火器を世界で最初に発明したにもかかわらず、その後ヨーロッパになぜ劣後したか、です。戦国時代の日本も同様ですが、16世紀半ばの中国も火薬も火器もヨーロッパ諸国に対し優位にあったにもかかわらず、その後技術開発で後れを取り、19世紀には欧米列強に国土を蚕食されることになりました。この問題は歴史ではなく極めて現代的な意味を持っています。ましてや中国だけの問題ではなく日本を含め世界全体の問題でもあります。今中国がなぜ技術強国やイノベーション強国をスローガンに掲げているのか。それは19世紀に清朝が西洋の技術導入につまずき、どうにか

西洋技術を導入した日本にも劣後し日清戦争で敗北したトラウマからでしょう。



2冊の翻訳本の「訳者あとがき」にも記しましたが、イギリスが大英帝国を築けたのは、インド硝石とアメリカの木灰をおさえたからだとの仮説を立てていました。黒色火薬の主成分である硝酸カリウムは動物由来の硝酸と植物由来

のカリウムから合成されます。硝酸はインドの硝石そしてカリウムはアメリカの森林の木灰から採れる炭酸カリウム、これらの原料を植民地から調達してイギリスは高品質の黒色火薬を大量に製造し、他の国を軍力で圧倒して思っていました。

しかし、その後の研究でこの仮説が間違っていたことがわかりました。イギリスが大英帝国を築けた真の理由は、科学革命とエネルギー革命がもたらした産業革命のおかげだったのです。科学革命で黒色火薬の爆発の仕組みを明らかにし、火薬成分の精製や混合を工業化するためにエネルギーを再生可能エネルギー利用の水車から化石エネルギーの石炭に転換し、蒸気機関を使って他国の追従を許さない高品質の火薬を大量生産できるようになったのです。今中国はAI革命とエネルギー革命の先端を走っています。現代の中国が、かつての大英帝国に重なって見えます。

祭りだ祭りだ！

山田次郎

今年も地元白井市の13自治会合同の夏まつりを行いました。例年ですとウルトラマンショー(円谷プロの本物)をやっていたのですが、予算不足から地元メンバーだけで盛り上げようとなり、フラダンス2団体とHip-Hopダンスをやり、和太鼓盆踊りを盛大に行いました。



## 蟹は何故横に動くのだろう

安藤 博

ひまです。夏休みだからというわけではない、もともとひまなのです。「小人閑居して…」というけれど、この暑さ、わざわざ良からぬことを企てようなんて思いません。

ただひまだから、ぼおつとではあるけれどいろんなこと



蟹はカメラでとらえるいとまもなく、横に消えた

ぶ川が自宅近くにある、その土手道を炎暑のなか行くと蟹が慌てたように道を横切って叢に逃げこんでいく。それが何故か一目散の横ばい。「前うしろではなく横だけに移動するなんて、この宇宙にこいつらしかないんじゃないか」と深く感じります。若き日のある時期、スピード競技の中で唯一、進行方向と逆を向いて頑張るボート漕ぎを日々のくらしとしていた、そのためか、横ばいには格別の思いを持つのです。

「何故、どうしてリンゴは樹から落ちるのか」、このように疑問を持つ事が、大げさにいえば人類を他の生き物と隔てる決定的な特質であり、人類進歩の原動力と言われたりします。

不思議な事といえば、それはなんといっても宇宙です。大先生は、宇宙が爆発したり縮んだりするという。大先生に聞いて見たい。その宇宙の果ては、どこでどんなふうになっているのですか、カベでもあるのでしょうか。しかし、そのカベの裏は何なのか、やはり宇宙ではないか、宇宙がさらに続いているのか。であれば宇宙には果てがないのか。

こんなふうに「何故、どうして」も果てしがありません。

いちばん身近な「何故、どうして」は、行動隊の立ち上げとその行動の淵源を問う事でしょう。発足から10余年を経たいま往時を思い起こすと、行動隊草創期の人たちの中には、不本意に終わった60年安保の“リベン”を原発、原発事故に向けているのかと思わせる方がいました。「東京電力を頂点とする多重下請け構造」といった反体制ふうの言葉が出ていて、「1F構内にスパナー本持って飛び込む」と社会革命の雰囲気がありました。

行動隊には“途中入社”の自分はどうなのか。「なぜ行動隊員になってくり返し福島に行っているんだろう？」と我ながら思います。ひまだから、ひまを持って余してというわけではありません。「あの当時ご縁のあったちょっといいひとから『老人特攻隊』ってのが出来たんですって、やってごらんさいよ」とけしかけられたので」と言ってみたらどうするか。「そんな見え透いた」と、たちどころにウソが割れてしまうでしょう。

こうした、ごく私的な、しかし様々な社会的関わり持つような「何故、どうして」に当たったときは、はるかに遠い学生時代に先生から聞かされた言葉を思い起こします。誤解する方はまあいないでしょうが、「学問の道に勤しむ中で得た恩師の言葉」といった学問的なことではありません。大畑末吉(1901/10/17-1978/4/25)というアンデルセンの翻訳で知られたドイツ語の先生でしたが、他に覚えていることはないのに大畑先生の「人生は、偶然を必然に変えていく営みだ」と言われたのだけは不思議に耳に残っています。それは、ただただ、大畑先生の授業が毎週の月曜日だったからです。月曜日は練習が休みで、ノートを借りに行くことなどもあって、毎週この日だけは学校に行き授業に出ていたのです。

行動隊員となったのはまさしく偶然です。「どうして」と聞かれても答えようのない、たまたまです。だからこそ思うのです。「たまたまそうなったからには、今日いちにちやれるだけのことはやってみよう」と。蟹なら「どうして」はともかく横にはう。同じように、自分なりのそれしかない動きを試みるという事です。

## 川内村ワイン事業10年記念祝賀会

安藤 博

わたくしたち福島原発行動隊の主要活動地の一つである川内村のワイン事業が十周年を迎え、8月1日に同村役場近

くのくカフェ・アマゾン川内村店>で、記念祝賀会がありました。この春、ブドウ苗木の植樹作業に参加した際、くかわうちワイン株式会社>の猪狩貢社長(前・川内村副村長)から、「行動隊理事長のご参加を」と招待を受けていましたので、加藤/安藤の新旧理事長が参加しました。



10年の苦勞をふりかえり、「売れる」ワイン造りへの抱負を語る猪狩社長



小さな村としては盛大な約55人参加の会で、国の復興庁統括官、内閣府審議官、福島県の農林水産部長、そして地元川内村の遠藤雄幸村長などが祝辞と激励の言葉を述べました。来賓であること

にもワイン事業の当事者でもある遠藤村長は「ぜひ儲けが出るように、税金が払えるようになって欲しい」と、ユーモアを交えながら、しかし村財政に大きな負担となっているこの事業に対する切実な思いを吐露しました。

猪狩社長は、主催者挨拶でこの十年のなみなみならぬ苦勞をつぶさに語られました。天候被害を受けてブドウの生産量が大きく減ってしまった年やワイン造りがほとんど出来なかった年も。

ブドウ作りがほぼ安定してきた今では、「売る」事が切羽詰まった課題になっています。赤、白、ロゼ、いずれも一本 3.500 円前後。スーパー、コンビニで 1.000 円ワインも買える事からすれば、決して安くはありません。

しかし、薄利多売ではチリ、南ア、オーストラリアなどからの輸入品にはとても太刀出来ない。猪狩社長は「成熟した特徴のある美味しいワインを」と意気込みを語りました。

国内には山梨、北海道(夕張)の先駆者、後発の東北でも山形には有力なセンパイが。さらに同じ福島にも二本松、会津、いわきなどに競争相手が。この先の厳しい途が偲ばれ、たまたまながらご縁が出来たこのワイン事業が、文字通り他人事ではないとの思いを新たにしました。

#### 【記念祝賀会司会者 遠藤一美】

くかわうちワイン株式会社> 総括マネジャー



川内村役場から出向。ワイン会社の組織管理・事務から営業まで全てに関わる

#### 【10年を振り返って】(かわうちワイン株式会社資料)

○2014 年冬

川内村の復興に資するワイン造りについて東京電力北村秀哉氏(現くかわうちワイン株式会社>取締役)の提案を受け初動開始



○2015 年春

試験栽培候補地探しを開始、気象観測・地質調査の実施、セシウム移行率の測定

○2015 年秋

現在の圃場(大平地区)が候補地となる(南向き斜面、栽培可能面積が広い)

○2015 年冬

圃場の耕起、整備を開始

○2016 年春

2100 本の苗木を植え付け(シャルドネ、メルロー、カベルネ・ソーヴィニヨン、ピノノワールなど多種)

○2016 年夏

<高田島ワインぶどう研究会>が発足。地域村民のワインへの関心を高め地元民の協力を得て圃場管理を開始、外部応援者との交流、村内ワイン勉強会を開催。

○2016 年冬

大平圃場の拡張工事を開始、暗渠敷設

○2017 年春

圃場を3ヘクタールに拡大、約8000本の苗木(シャルドネ、メルロー、カベルネ・ソーヴィニヨンなど)を植え付け、10,000本のブドウ樹育成を開始

○2018 年 8 月 1 日

<かわうちワイン株式会社>設立

○2020 年冬

山梨大学で試験醸造

○2020 年冬

川内村醸造施設建設開始

○同

栽培・醸造経験者、安達貴氏を地域おこし協力隊として

任用



ワイン造りの成否がこのひとの双肩にかかっている

2021 年 6 月

川内村醸造施設<かわうちワイナリー>開所

○2021 年(初収穫/初醸造)

自社ブドウ 7.4 トン+買いブドウ 5.3 トンにより生産本数約 11,000 本

○2021 年 6 月

川内村醸造施設<かわうちワイナリー>開所

○2021 年(初収穫/初醸造)

自社ブドウ 7.4 トン+買いブドウ 5.3 トンにより生産本数約 11,000 本

○2022 年(2 年目)

梅雨期の長雨天候不順により収穫量減。自社ブドウ 4.8 トン+買いブドウ 7.8 トンにより生産本数約 12,000 本。

栽培品種の転換を検討

○2023 年(3 年目)

天候に恵まれ収穫量増加。自社ブドウ 14.8 トン+買いブドウ 8.9 トンにより生産本数約 20,000 本(予定)

○2024 年 7 月 26 日

日本ワインコンクール 2024 で欧州品種赤部門銅受賞



【行動隊 9 月スケジュール】

下記の会議・集会はどなたでもご参加いただけます。

○院内集会 (予定)

9 月 12 日(木曜)

□『SVCF 通信』

9 月 20 日(金曜) 発行

□連絡会議

以下の各金曜日 10:30-

9 月 6、13、20、27

SVCF 通信 : 第 173 号 2024 年 8 月 23 日

